

サンプル

入学試験

国語

注意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は□から五まで、12 ページにわたって印刷してあります。ページの脱落などがあつた場合には申し出なさい。
- 3 解答記入には黒鉛筆またはシャープペンシルを使いなさい。ボールペン・サインペンを使ってはいけません。
- 4 解答用紙には、受験番号と名前を記入しなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に書き、解答用紙を提出しなさい。
- 6 解答は、問題の指示に従って、解答用紙の決められたらんに書きなさい。
- 7 解答の下書きが必要なときは、この問題用紙の余白を利用しなさい。句読点、記号は字数に数えます。
- 8 本文中には、問題作成のための省略や表記を変えたところがあります。

かえつ有明高等学校

一 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。
画増展で入賞する。

① 裁判を傍聴する。

② ローマ帝国の窮乏を調べる。

③ 決意を懐深く秘める。

④ 成功の瞬には盛大に祝おう。

二 次の各文の――を付けたカタカナを漢字で書け。

① 市民のチンジョウを受ける。

② 制限時間をチヨウカする。

③ キュウリョウに登る。

④ 学費にアてる。

⑤ ハナハだ迷惑な話だ。

三 次の A は一九八〇年に、B は二〇〇〇年に、それぞれ同じ筆者によって書かれた文章である。A・B を読み、あとの問いに答えよ。

A

生物はすべて細胞からできており、その中に遺伝子として DNA という物質が入っている。DNA は工夫をこらした電子顕微鏡でやっと見える細長いテープのようなものだ。そのテープの上には、生物の体を構成する成分のつくり方についての情報がつまみ綴られている。つまり、遺伝子 DNA は生物の基本的な性質をきめている物質といえる。①最近の生物学では、遺伝子の研究が精力的に行われた。その結果はつきりしたことは、地球上に存在している生物はすべて DNA を遺伝子としている点で皆仲間と言つてよいということである。もちろん生物によって、持っている遺伝子の種類や量は異なっている。しかし、その構造やはたらか方は、人間でも犬でもミミズでも同じなのである。それどころか、動物と植物との間にも差はない。

遺伝子が共通なら、種類の違う生物の遺伝子をつなぎ合わせて新しい性質の生物をつくることができるだろうか。このような発想が出るのは当然だろう。ビデオテープをつなぎ合わせて編集し、新しい物語をつくるのと同じように。そして、この問いに対する答えはイエスだった。異種の生物の遺伝子を組み換えたり、

混ぜ合わせたりする技術が生まれたのである。遺伝子組換え、細胞融合などと呼ばれるものがそれだ。

ポタト——ポテトとトマトの細胞を融合させてつくった両方の性質を備えた植物である。地上では真っ赤なトマトが熟れ、地下にはジャガイモがなるというそんな夢をこめた研究も進められている。実現は難しいとしても夢としては楽しい。しかし、それと同じく地上にハクサイ、地下にダイコンという組み合わせの作物をつくらうとしたら、ダイコンの葉とハクサイの根を持った植物になってしまったという話がある。もちろんこれは笑い話だが、遺伝子の組み合わせは、まだ人間の意のままに自由自在というわけにはいかないという現実を踏まえ、警告を与えているのである。異種の遺伝子の融合の技術は、新しい夢を与えてくれる。しかし、生物のしくみについて私たち人間が持っている知識は、まだほんの少しなのだ。そのことを肝に銘じて、生物に学ぶという謙虚な気持を忘れずに、②新しい技術を使いこなしていくことが大切だと思う。

B

* この短文を読み返しながら、当時のこと、そして今のことが同時に頭の中でフラッシュをたくように浮かび上がってきた。次いで、その間の二十年間が思い出された。

りいただけるだろう。機械と化学製品の組み合わせで進めてきた農業が行き詰まり、もつと自然の力を生かした有機的な農業にしなければならない。そこで作物に耐病、耐虫などの性質を入れようということだ。

もちろんでき上がったダイズやトウモロコシの安全性は重要で、そのチェックは不可欠だ。それが保証されれば、環境の破壊の少ない農業が可能になり、二十一世紀が見通せる。

ところで「遺伝子組換え」で作った作物は危ないという反応が出て来てしまった。これは困ったことだ。一つ一つの作物について安全性を確かめることは大事だ。それをおろそかにして新しい食品を世に出すのは恐い。しかし、遺伝子組換えという技術そのものが危険なのではないのだから十把一からげで遺伝子組換え食品は危険だと言うのは筋違いだと思う。ここをよく見きわめないと、二十一世紀に向って望ましい農業を作れないし、農業が地に足をつけていない社会は不安定だ。

ちょうど二十年かけて、実際の製品にまでなった遺伝子組換え作物について、事実をよくみつめた賢い判断をしていきたいものだ。

(中村 桂子『生命科学者ノート』より)

③ この間に生物研究が急速な進展を遂げたことは誰もが認めるところだ。免疫*、がん、脳……これらが解明されつつあり病気の原因の遺伝子もわかってきた。どれも遺伝子組換え技術を用いた結果できたことだ。

遺伝子組換えは革命的技術と言つてよい。しかし一方、異種の生物から遺伝子を移した結果ででき上がった生物についてみると、とんでもなく新しいものなどはできないということもわかった。それぞれの生きものには、トマトはトマトとして、ヒトはヒトとしての全体性があり、それは崩せない。それは保ちながらその中の性質のほんの一部を変える方法として組換えを使うのだ。これは、技術としては限界だが、これこそ自然の摂理であり、それがあるから安心していられるとも言える。人間が思うがままに操作できるものではないことを教えてくれるのだから。

ここにあげたポタトは、遺伝子組換えでなく細胞融合でできたものだが、これも安定した作物となったという話は出て来ない。④それは無理だよという自然からのメッセージだろう。

ところで、昨今話題になっているのが、遺伝子組換え食品。そのもととなる作物は、⑤遺伝子組換え技術で作ったダイズ、トウモロコシ、ジャガイモ、ナタネなどだ。いずれも除草剤耐性、害虫耐性などの性質を入れている。この性質を入れた理由はおわか

注 DNA——「デオキシリボ核酸」を表す英語から生まれた

略語で、遺伝のもととなる情報があり、同じ性質を親から子へ、子から孫へと伝えていく役割をしている。

この短文——Aの文章を指す。

免疫——「自分と違う異物」を攻撃し、排除しようとする防御システム。

問一 「①最近の生物学」とあるが、「最近の生物学」が明らかに

したことは何か。次の中から最も適切なものを選べ。

A 生物は、その体を構成する成分は異なるが、すべて地球上に存在している細胞からできているということ。

I それぞれの生物の細胞は、その構造やはたらき方において、動物でも植物でも差はないということ。

ウ それぞれの生物のDNAは、種類や量は同じなのにもかかわらず構造やはたらき方が違うということ。

E 生物は、その細胞に持っている遺伝子の種類や量は異なるが、すべてDNAを遺伝子としているということ。

問二 「②新しい技術」とはどのようなものか。次の中から最も適切なものを選べ。

- ア 異種の遺伝子を組み換えたり混ぜ合わせたりすることによって、新しい性質を持った生物を作り出すというもの。
- イ 異種の遺伝子の組み合わせや融合によって、すでに絶滅してしまった生物を再び復活させるというもの。
- ウ ある品種の遺伝子をすべて作りかえることによって、これまでに存在しなかった新しい生物を作り出すというもの。
- エ ある品種の遺伝子を複製することによって、一つの個体から同じものを多数作り出すというもの。

問三 「③この間に生物研究が急速な進展を遂げた」とあるが、「急速な進展」の結果明らかになったことは何か。次の中から適切なものを二つ選べ。

- ア 病気の原因となる遺伝子の特定が可能であるということ。
- イ 一度絶滅した生物が遺伝子操作で繁殖できるということ。
- ウ 遺伝子の組み合わせが進化の歴史を表しているということ。
- エ あらゆる生物が自然界において突然変異しないということ。
- オ 全く新しい生物を人工的に作ることが不可能だということ。

問四 「④それは無理だよという自然からのメッセージだろう」とあるが、「自然からのメッセージ」とは何か。次の中から最も適切なものを選べ。

- ア 個々の生物の遺伝子を操作することによって、生態系のバランスをよりよく保つべきだということ。
- イ 生きものにはそれぞれの全体性があり、人間の思い通りに遺伝子を操作することはできないということ。
- ウ 原因となる遺伝子は分かったが、すべての病気を治療したり予防したりすることは不可能だということ。
- エ はじめから無理だとあきらめることなく、人間の思うがままに新しい生きものを作り出すべきだということ。

問五 「⑤遺伝子組換え技術で作ったダイズ、トウモロコシ、ジャガイモ、ナタネなど」とあるが、こうした作物が必要とされた背景は何か。次の中から最も適切なものを選べ。

- ア 広大な耕地を利用した大規模農業への転換。
- イ 専業農家における慢性的な労働力不足の解消。
- ウ 機械と農業に依存してきた農業からの脱却。
- エ 食糧自給率を高める必要と少子高齢化への備え。

問六 Bの文章の後半には、二十年前の筆者になかった新しい視点がみられるが、それはどのようなものか。文中の例を用いて八十字以内で説明せよ。

④ 次の小説は川端康成が昭和元（一九二五）年一月に発表した『伊豆の踊子』の冒頭部分（第一章と第二章）である。これを読み、あとの問いに答えよ。

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を迫って来た。

私は二十歳、^{*}高等学校の制帽をかぶり、紺がすりの着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。修善寺温泉に一夜泊まり、湯ヶ島温泉に一夜泊り、そして朴歯（ほおば）の高下駄で天城を登ってきたのだった。重なり合った山々や原生林や深い溪谷の秋に見とれながらも、

① 私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。そのうちに大粒の雨が私をうちはじめた。折れ曲がった急な坂道を駆け上った。ようやく峠の北口の茶屋にたどりついてはつとすると同時に、私はその入り口で立ちすくんでしまった。あまりに期待が見事に的中したからである。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っている私をみた② 踊子が直ぐに自分の座布団をはずして、裏返しにそばに置いた。「ええ……」とだけいって、私はその上に腰をおろした。坂道を走った息切れと驚きとで、「あり

がとう」という言葉のどに引つかかって出なかったのだ。

踊子と真近に向いあつたので、私はあわてて袂(たもと)から煙草(たばこ)を取り出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引き寄せて私に近くしてくれた。やっぱり私は黙っていた。

踊子は十七くらいに見えた。私にはわからない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。それが卵形のりりしい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。(中略)

踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏(しるしばんてん)をきた二十五六の男がいた。私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。その時は若い女が三人だったが、踊子は太鼓をさげていた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思った。それから、湯ヶ島の二日目の夜、宿屋へ流してきた。踊子が玄関の板敷で踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下ろして一心に見ていた。――あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南にこえて湯ヶ野温泉へいくのだろう。天城七里の山道できつと追いつけるだろう。そう空想して道を急いだのだったが、雨宿りの茶屋でびったり落ち合ったものだから、私は③ときまぎしてしまったのだ。

まもなく、茶店の④はあさんが私を別の部屋へ案内してくれた。

れいになったのかねえ。女の子は早いもんだよ」

小一時間たつと、旅芸人たちがいでたらしい物音がきこえてきた。私も落ちて着いている場合ではないのだが、胸騒ぎするばかりでたちあがる勇気がでなかった。旅なれたといっても女の足だから、十町や二十町おくれたって一走りには追いつけると思いがら、囲炉裏のそばでいらしていた。しかし踊子たちがそばにいないとなると、かえって私の空想は解き放たれたように生き生きと踊りはじめた。

彼らを送り出してきたばあさんに聞いた。

「あの芸人は今夜どこで泊まるんでしょう」

「あんな者、どこで泊まるやらわかるものでございませうか、旦那様。お客があればあり次第、どこにだって泊まるんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございませうもんか」

はなはだしい軽蔑を含んだばあさんの言葉が、それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊まらせるのだ、と思ったほど私をおおりにたてた。

雨脚が細くなつて、峠があかるんできた。もう十分も待てばきれいに晴れ上がると、しきりに引き止められたけれどもじつと座つていられた。なかった。

「おじいさん、お大事になさいよ。寒くなりますからね」と、私は心から言つて立ち上がった。じいさんは黄色い目を重そうに動

平常用はないらしく戸障子がなかった。下をのぞくと美しい谷が目届かないほど深かった。私は、肌に粟粒(あわつぶ)をこしらえ、かちかちと歯を鳴らして身ぶるいした。茶を入りに来たばあさんに、寒いというと、「おや、どんな様お濡れになつてるじゃございせんか。こちらでしばらくおあたりなさいまし、さあ、お召物をお乾かしなさいまし」と、手をとるようにして、自分たちの居間へ誘つてくれた。

その部屋は炉(ろ)が切つてあつて、障子を明けると強い火気が流れてきた。私は敷居際(しきいぎわ)にたつて躊躇(ちゅうちよ)した。水死人のように全身あぶくれのじいさんが炉端にあぐらをかいているのだ。(中略) ばあさんが話したところによると、じいさんは長年中風(ちゅうふう)をわずらつて、全身が不随になつてしまっているのだそうだ。(中略)

私はばあさんに答える言葉もなく、囲炉裏の上につむいていた。

山を越える自動車が家をゆすぶつた。秋でもこんなに寒い、そして間もなく雪に染まる峠を、なぜこのじいさんはおりないのだろうと考えていた。私の着物から湯気がたつて、頭が痛むほど火が強かった。ばあさんは店に出て旅芸人の女と話していた。

「そうかねえ。この前連れていた子がもうこんなになつたのかい。いい娘(あんこ)になつて、お前さんもけつこうだよ。こんなにき

かしてかすかにうなずいた。

「旦那様、旦那様」と叫びながらばあさんが追つかけてきた。

「こんなになつてはもつたのうございませう。申し訳(わけ)ございません」

そして私のカバンを抱きかかえて渡そうとせず、いくら断つてもその辺まで送ると言つて承知しなかった。(中略)

私は五十銭銀貨を一枚置いただけだったので、痛く驚いて涙がこぼれそうに感じているのだったが、踊子にはやく追いつきたいものだから、ばあさんのよろよろした足取りが迷惑でもあつた。とうとう峠のトンネルまできてしまった。

「どうもありがとう。おじいさんが一人だから帰つてあげてください」と私が言うと、ばあさんはやつとのことでカバンを離した。暗いトンネルに入ると、冷たいしずくがぼたぼた落ちていた。

⑤南伊豆への出口が前方に小さく明るんでいた。

二

トンネルの出口から白塗りの柵に片側を縫われた峠道が稲妻のように流れていた。この模型のような展望の裾の方に芸人たちの姿が見えた。六町といかないうちに私は彼らの一行に追いついた。しかし急に歩調を緩めることも出来ないの、私は冷淡な風に女達を追い越してしまつた。十間ほど先に一人歩いていた男が私を見ると立ち止まつた。

「お足が早いですね。——いい塩梅(あんばい)に暗れました」
⑥ 私はほつとして男と並んで歩き始めた。

男は次々にいろんなことを私に聞いた。二人が話し出したのを見て、うしろから女たちがばたばた走り寄ってきた。

男は大きい柳行李(やなぎこうり)を背負っていた。四十女は小犬を抱いていた。上の娘が風呂敷包み、中の娘が柳行李、それぞれ大きい荷物を持っていた。踊子は太鼓とその杵を負うてた。四十女もぼつぼつ私に話しかけた。

「高等学校の学生さんよ」と上の娘が踊子にささやいた。私が振り返ると笑いながら言った。

「そうでしょう。それくらいのことには知っています。島へ学生さんがきますもの」

一行は大島の波浮(はぶ)の港の人たちだった。春に島を出てから旅を続けているのだが、寒くなるし、冬の用意はしてこないの、下田に十日ほどいて伊東温泉から島へ帰るのだと言った。大島と聞くと私は一層詩を感じて、また踊子の美しい姿を眺めた。大島のことをいろいろたずねた。

「学生さんがたくさん泳ぎに来るね」と踊子が連れの子に言った。

「夏でしょう」と、私が振り向くと、踊り子はどきまぎして、

「冬でも……」と小声で答えたように思われた。

「冬でも？」

踊り子はやはり連れの子を見て笑った。

「冬でも泳げるんですか」と、私がもう一度言うと、踊子は赤くなって、非常にまじめな顔をしながら軽くなずいた。

「馬鹿だ。この子は」と四十女が笑った。

湯ヶ野までは河津川の溪谷に沿うて三里余りの下りだった。峠を越えてからは、山や空の色までが南国らしく感じられた。私と男とは絶えず話し続けて、すっかり親しくなった。荻乗(おぎのり)や梨本(なしもと)などなぞの小さい村里をすぎて、湯ヶ野の藁屋根(わらやね)が麓に見えるようになった頃、私は下田まで一緒に旅をしたいと思いつて言った。彼は大笑喜んだ。

湯ヶ野の木賃宿の前で四十女が、ではお別れ、という顔をしたときに、彼は言ってくれた。

「この方はお連れになりたいとおっしゃるんだよ」

「それは、それは。旅は道連れ、世は情。私たちのようなつまらない者でも御退屈(ごたいくつ)のぎにはなりますよ。まあ上つてお休みなさいまし」と無造作に答えた。娘たちはいちどきに私を見たが、至極なんでもないという顔で黙って、少しはさしそくに私を眺めていた。

注 高等学校——戦前の学校で現在の大学に相当するもの。進

学する学生は少なく、社会からはエリートとみられている。

十町や二十町——一町は約一〇九メートル。

十間——一間は約一八〇センチメートル。

木賃宿——粗末な安宿。食事を提供する旅館とは異なり自炊が原則であった。

問一「①私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいる」と

はどういうことか。その説明として最も適切なもの次の中から選べ。

ア 旅芸人の踊りがありにすばらしかったため、もう一度それ

をみるために湯ヶ島温泉への道を急いでいる。

イ 踊子の美しさが忘れられず、一刻もはやく会いたいとの一心で彼女のいる峠の茶屋を目指している。

ウ 踊子のいる旅芸人一行に追いつけるはずだという思いで湯ヶ野温泉をめざし、早足で移動している。

エ 突然の雨に濡れてしまったため、はやく着物をかわかそうと天城峠の北側の茶屋をめざしている。

問二「②踊子」に「私」が過去において強い興味を抱いたことが

わかる一文が第一章の中にある。それをさがし最初の五字を書け。

問三「③どきまぎ」の意味として最も適切なものを次の中から選

べ。

ア 不意をつかれて平静さを失いうろたえる様子

イ 驚きや恐れから鼓動がひととき強くなる様子

ウ 心が沈みこみ物悲しくなっている様子

エ 心の底から深く感じ入っている様子

問四「④ばあさん」は「旅芸人」をどのようにみているか。「私」

との違いを考察したものとして最も適切なものを次の中から選べ。

ア 「私」にとっては親しい存在である旅芸人一行に「ばあさん」は言葉もかけずに冷たく突き放している。

イ 「私」に緊張や不安を与える旅芸人一行に対して「ばあさん」は親しい仲間意識をもつてなしている。

ウ 「私」は珍しい旅芸人に特別な旅情を感じているが「ばあさん」は見慣れた存在として穏やかな態度で接している。

エ 「私」には偏見がないが「ばあさん」は旅芸人を「あんな者」と呼び、社会的に価値の低い者だとさげすんでいる。

問五「⑤ 南伊豆への出口が前方に小さく明るんでいた」とあるが、

この表現が暗示していることとして最も適切なものを次の中から選べ。

- ア 今後の展開が「私」にとって完全ではないが好ましい方向で動き始めることを暗示している。
イ 寒さをもたらした雨がやみ、気温が南国地方特有のあたたかさに変わることを暗示している。
ウ 「ばあさん」への不愉快だった感情が「私」の中でおだやかなものにならなっていくことを暗示している。
エ トンネルを抜けた直後から「私」と「踊子」との関係が親密なものにならなっていくことを暗示している。

問六「⑥ 私はほっとして」とあるが、この気持ちが生まれたきっかけと理由を四十文字以内で説明せよ。

〔五〕 次の、松平定信（一七五八—一八二九、江戸時代の政治家）

の文章を読み、あとの問いに答えよ。

あるくすしが「君は必ず、この秋のころ、何ぞのいたづきにかかり給はん」といふを、むづかりて、①「いかでさることあらん」と秋まではいひぬ。つひにいたづきにかかりければ、いひあてしくすしにあはんも、おもてぶせなりとて、よそのくすしまねきてけり。さまざま薬与へたりたるが、しるしもみえず。せんかたなくて、試みにふと調ぜし薬、その病にあたりやしけん、のみくだすより胸の内心地よく、つひにその病いえにけり。いのちたすけし人なりとて、家傾けてもむくいまほしく思ひしとなり。さるに、②「こん秋は、必ずこの病いづべし。この薬今よりのみたまへ」といふを、いまひとりののをのこ、③「いかでさあらん。されどさ言ひ給はば飲みて参らすべし」とて、ひとことのやうに飲みゐたるが、つひに病もおこらず、常にかはりしことなかりしかば、④「さればこそ、かくあるべけれと思ひしを、あの薬のまでもあるべきものを」といひきや。

注 くすし——薬を用いて病気を治療する人。

いたづき——病氣。

むづかりて——不ゆかいに思つて。

おもてぶせなり——恥ずかしい。

いえにけり——治った。
のまでも——飲まなくても。

問一 右の文章を前半と後半に分けるとすると、後半はどこからか。次の中から最も適切なものを選べ。

- ア つひにいたづきにかかりてければ、・・・
イ さまざま薬与へたりたるが、・・・
ウ いのちたすけし人なりとて、・・・
エ さるに、・・・

問二 ①～④のセリフの主（話し手）はだれか、あとの中からそれぞれ最も適切なものを選べ。（ただし、同じものを繰り返し使用してもよい。）

- ア あるくすし
イ 君
ウ よそのくすし
エ いまひとりののをのこ
オ 筆者

問三 文中の「君」と呼ばれる人物は、「よそのくすし」に対してどのような「思い」をもったのか。次の中から最も適切なものを選べ。

- ア 指示に従わなかったことに後ろめたさを感じている。
イ 指示は聞いたが、余計なお世話をする人だと感じている。
ウ 命を助けてもらったことに大きな恩を感じている。
エ 未来を決めつけるその発言に苦々しさを感じている。

問四 本文で述べられた「医師と患者の関係」を「政治家と庶民の関係」として読みかえた場合、ここに描かれた患者の反応や態度はどのように読むことができるか。政治家である筆者がこの文章に込めた真意についてあなたの「考え」を八十文字以上百文字以内で述べよ。